

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12534

研究課題名（和文）アフリカのサバンナ地帯における植物の採集、流通、消費：人 植物関係の超地域的展開

研究課題名（英文）Gathering, distribution and consumption of edible plants in Africa: the trans-regional development of human-plant relationships.

研究代表者

八塚 春名 (Yatsuka, Haruna)

津田塾大学・学芸学部・准教授

研究者番号：40596441

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、食用に利用される野生/半栽培植物に着目し、市場を起点に採集や消費の場へと植物を追うことによって、植物をめぐるネットワークと植物利用の変遷を明らかにすることを目的に、タンザニアでフィールドワークを実施した。栽培化されておらず、地域限定的に利用される食用植物は、都市で販売されるが流通範囲は狭く、販売規模も小さいため、地域住民に大きな経済効果はない。しかし、地域内では強く好まれる重要な食料である。また、これら植物には地域の「こだわり」が存在し、複数都市で販売される植物でも細かな差異が見られた。以上から、ローカルな食用植物は、出所である故郷の農村と都市居住者をつなぐ役目を果たすと考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

- 1.本研究は、これまで個別の社会を対象にした議論が中心であった植物利用に関して、市場を起点に流通や採集を追うという新しい調査の視点を確立した。
- 2.その結果、食料問題を抱えるアフリカにおいて、近代農業を促進し農作物を増産するという画一的な対応ではなく、むしろローカルな食材を再評価し、その利用を維持することの意義を再考することにつながった。
- 3.研究成果はこれまでに日本アフリカ学会や生態人類学会など複数の学会において報告をした。

研究成果の概要（英文）：This study aims to clarify the networks surrounding the use of edible wild/semi-cultivated plants and the transitions in the use of these plants. The research methodology was based on fieldwork in Tanzania, following plant use from the urban market to collection and consumption.

Edible plants, which are not cultivated and used only locally, are sold in cities, but their distribution is narrow and the scale of sales is small, so they do not have a large economic impact on local residents. However, they are strongly preferred for foodstuff within the region. In addition, there are regional and individual “sticking points” in the use of these plants, and thus minor differences were observed even among plants sold in multiple cities. From the above, it was concluded that local edible plants serve as a link between the rural areas of their hometowns and the urban dwellers.

研究分野：生態人類学

キーワード：人 植物関係 食用植物 マーケット 採集活動 アフリカ 都市 農村関係

## 1. 研究開始当初の背景

国連の「世界人口予測 2017 年改定版」によれば、現在 12 億 5600 万人であるアフリカの人口は、2050 年には 25 億を超える。この増え続ける人口を養う食料を確保するために、農作物の生産性向上は喫緊の課題だとされている。他方、アフリカの市場には、農作物以外にも野生や、半栽培（人の関与をもつ野生と栽培の中間の状態）の植物も多く販売されている。アフリカの地方に暮らす人びとにとって、これらの植物が伝統的に重要な食料源になってきたことはいまでもなく、生態人類学や地域研究の分野では、個別の社会を対象にした植物利用の豊かさについて、数多く報告されてきた。

とはいえ、こうした野生や半栽培の状態にある植物の多くは、限定された地域内でのみ利用され、経済効果も決して大きくない。とくに、資源の種類が限られ、密度が低いサバンナ地帯では、シアバターを抽出するシアナッツのように、国内・国外双方に向けて市場をもつものはごくまれである。そのため、農産物や林産物の生産統計で把握されている野生/半栽培植物は少なく、生産、流通、消費の実態が量的・質的に把握される機会はほとんどない。たとえばゴマ科の 1 年生草本 *Ceratotheca sesasmoides* の葉は、東部から西部アフリカのサバンナ地帯で広く食べられている。タンザニア中央部では乾季の重要な副食になり、ガーナ北部の市場では、乾燥葉がスープの材料として販売されている。ところが、食料問題や農業支援を担う国際機関や NGO が、この植物の有用性や売買の実態を把握する機会はほとんどなく、食料問題の解決策に、野生/半栽培植物の重要性が反映されることは少ない。

他方、アフリカにおける個別の社会を対象にした野生植物利用の研究は、生態人類学や民族植物学の得意とするところであり、非常に豊富な研究蓄積がある（たとえば Terashima, Ichikawa and Sawada, 1987）。とはいえ、これらの調査は、基本的にひとつの社会に長く滞在しておこなわれるため、市場での流通という地域の外でかわされるやりとりについてはあまり把握されてこなかったといえよう。一方、アフリカにおける葉菜 (leafy vegetable) のリスト化や栄養分析の研究も多数おこなわれてきた（たとえば Maundu 1999; Bedigean, 2004）。しかし、こうした研究においては逆に地域の個別の背景や個人のネットワークを介した植物利用の地域的伝播や流通網の展開といったミクロな視点は抜け落ちてしまいがちである。

本研究代表者が研究を続けるタンザニア中央部に暮らすサンダウエは、19 世紀中ごろまで狩猟採集を生活の基盤としてきたと考えられており、今日では農耕中心の生業活動を実施している。農耕を開始して人間による環境攪乱が起こったことにより、サンダウエの農地には、攪乱地に適応する「雑草性植物 (阪本, 1995)」が出現した。そして、それらは単に「邪魔なもの」として除去されるだけの存在ではなく、彼らの食生活にとって有用なものも少なくない (八塚, 2011; 2012)。たとえば、先に挙げた *C. sesasmoides* の葉は、非常によく食べられており、彼らはその乾燥葉を他者に分配したり、穀物と交換をする (八塚, 2011)。タンザニア中央部の都市における市場や売店でも、どこからかもたらされた *C. sesamoides* の乾燥葉が販売されている。しかし、同国内であっても、*C. sesamoides* や、類似の雑草性植物をほとんど食べない地域もあり、野生/半栽培植物にたいする評価には、非常にローカルな文脈が反映される。また、ガーナ北部で話を聞いたある女性は、他者の畑で *C. sesamoides* を購入し、町の市場に卸していると語った。つまり、*C. sesamoides* のような植物は、地域あるいは個人の経済に小規模ながら貢献しているといえる。他方、野生/半栽培植物のやりとりは、経済規模が小さく流通経路やアクターが固定しておらず、誰もがその獲得や販売に参入できるような、きわめてインフォーマルなやりとりだと推測することもできる。野生/半栽培植物のローカル社会における利用については、その種類や採集と消費の方法が多数報告されてきたが、流通の実態や関与するアクター、消費にみられる地域差、利用の地域的拡がりに関する歴史は、これまで報告されてこなかった。それは、先行研究が、個別の社会を対象に植物利用の議論を進めてきたために、地域を超えたインフォーマルなやりとりを把握することが難しかったからといえよう。

## 2. 研究の目的

以上を踏まえて本研究では、アフリカのサバンナ地帯において食用に利用される野生/半栽培植物に着目し、市場（いちば）を起点に、そこから採集や消費の場へと植物利用の展開を追うことによって、地域や社会を超えた、植物を核にした広域なネットワークと、植物利用の伝播や歴史的展開の解明を目指す。今日、グローバル・フードシステムへの反省から、小規模な地理的範囲における食の生産—流通—消費に着目したフードスケープ研究 (河合, 2021) の存在や、食の安全保障や気候変動対策としてアフリカの地方における食用植物の利用が有効である (Catarino et al., 2019) といったように、ローカルな食料システムが再注目されている。その流れを受けるように、2021 年にはケニアの伝統料理における在来の植物利用を再評価する動きそのものがユネスコの無形文化遺産に登録された (UNESCO, 2021)。そこで本研究では、上記の目的を通して、アフリカにおけるローカルな食料システムの意義を考えることを最終的な目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究は当初、東アフリカのタンザニア中央部と西アフリカのガーナ北部にて現地調査を実施することを予定していた。それら2つの調査地が類似の環境でありながら、社会的条件が異なることを踏まえて、植物の流通や利用の展開の差異を追求したいと考えていたからである。しかし、研究期間中に起こった新型コロナウイルス感染症拡大による現地調査の中断の影響もあり、ガーナでの調査は実現できなかった。一方で、タンザニア国内では中央部に限定せず複数地域において、以下の に関する調査を実施した。

市場で食用を目的に販売される植物（野生/半栽培植物）の種類と流通の実態把握  
植物利用の地域的な差異や変遷に関する聞き取り

### 4. 研究成果

市場では、複数の食用植物種が販売されていた。ただし、生葉を販売するのか、乾燥させて保存が効く状態で販売するのかによって種類は異なり、雨季においては前者のほうが種類が豊富であった。一方で、乾燥させて保存が効く状態で販売されているものはほぼすべて、ムレンダ (mlenda) という粘性のある副食に使用される材料であった。本研究では、このムレンダの材料に着目して、その種類と流通を把握した。

タンザニアの首都ドドマ、東部のタボラ、北部のカラトゥ、南部のイリンガにおいて複数の都市の市場を訪れた。ドドマ、タボラ、カラトゥにおいては、畑に生える雑草性植物であるゴマ科の *C. sesamoides* を乾燥させたものが販売されており、そこにカボチャの葉やウリ科の野生植物の乾燥葉を混ぜたものも販売されていた。それらの出所としては、a) 仲介人が存在、b) 農村に住む親族から取り寄せ、c) 近隣村の住民から直接購入 の3パターンがみられた。a) については、仲介人は近郊の農村で買い付け、それを都市部の市場に販売に来るが、仲買人・採集者・市場での販売者のあいだに親密な関係性はみられなかった。つまり、アクターが固定しておらず、参入が容易であるといえ、とくに農村の売り手については、*C. sesamoides* が農地に生える雑草性植物であるため、誰もが容易に採集し売り手になることができるということが明らかになった。一方、*C. sesamoides* は複数地域で採集、流通、消費されることがわかったが、保存方法や調理方法などに関して、多様な「こだわり」が見られた。都市部の市場には、都市居住者が自家消費用として買いに来るが、他地域出身者は「わたしたちのムレンダと違う」と購入しないことも多かった。

もう一つの調査地、南部のイリンガでは、*C. sesamoides* も食べられるものの、*Zanthoxylum chalybeum* (ミカン科) の乾燥葉がムレンダの材料として好まれていた。ここでは、イリンガ郊外のD村において採集した人自身が都市の路上で販売する事例と、商人がD村で買い付けて都市部の路上で販売する事例が見られた。いずれも都市の市場で店舗を構えるのではなく、路上で販売されており、前者はバスターミナルで販売していた。またD村は産地として認識されていた。*Z. chalybeum* は薬として広く認知・利用されているものの、食用利用はD村を中心としたイリンガ州と、タボラ州の一部だけで確認された。しかしタボラ州でも、薬としての有用性ゆえに個体数が減少したり、ムレンダとして利用するために葉を乾燥させ粉にする工程に手間がかかることから、現在では極めて限られた地域のみで食べられていることが明らかになった。それゆえ、食べる人びとにとっては、この植物や産地へのこだわりが非常に強いことも示唆された。

以上から、栽培化されておらず、地域限定的に利用される食用植物は、都市の市場で販売されているものの流通範囲は狭く、販売規模もきわめて小さいということが明らかになった。これらの植物は地域住民にとって大きな経済効果はないが、地域内では強く好まれる重要な食料のひとつであった。ローカルな食の嗜好性が強く表れる食べ物だからこそ、商品として複数都市で販売される植物であっても、細かな地域差や売り手による「こだわり」が見られた。そのことが、都市に暮らす近隣村出身者や帰省した人びとを都市の市場や路上での買い手として定着させることにつながっていた。つまり、これらのローカルな食料資源は、農村出身の都市居住者と故郷である農村とをひそかにつなぐ資源になっていると考察した。

### 参考文献

- Bedigian, D. (2004) "Slimy leaves and oily seeds: Distribution and use of wild relatives of sesame in Africa", *Economic Botany* 58: S3-S33.
- Catarino, L., M. M. Romeiras, Q. Bancessi, D. Duarte, D. Faria, DF. Monteiro and M. Margarida (2019) "Edible leafy vegetables from west africa (Guinea-Bissau): consumption," *Trade and Food Potential*, 8(10):493.
- Maundu, P. M. (1999) *Traditional food plants of Kenya*, Kenya Resource Centre for Indigenous Knowledge, National Museums of Kenya.
- Terashima, H., M. Ichikawa and M. Sawada (1987) "Wild plant utilization of the Balese and the Efe of the Ituri forest, the Republic of Zaire", *African Study Monographs, Supplementary Issue* 8: 1-78.
- UNESCO (2021) "Success story of promoting traditional foods and safeguarding traditional foodways in Kenya" *Intangible Cultural Heritage*, <https://ich.unesco.org/en/BSP/success-story-of-promoting-traditional-foods-and-safeguarding-traditional-foodways-in-kenya-01409> (2022年9月12日最終アクセス).
- 河合洋尚 (2021) 「食の景観—グローバル社会のフードスケープ」 河合利光編 『食の世界を生きる—食の人類学への招待』 時潮社, pp.190-205.

- 阪本寧男 (1995) 「半栽培をめぐる植物と人間の共生関係」 福井勝義編 『講座 地球に生きる  
4 自然と人間の共生』 雄山閣出版, pp.17-36.
- 八塚春名 (2011) 「タンザニアのサンダウエ社会におけるニセゴマ (*Ceratotheca sesamoides*) の  
『半栽培』—乾燥葉の保存と分配に注目して」 『アフリカ研究』 78: 25-41.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 飯田義彦・八塚春名	4. 巻 68(3)
2. 論文標題 トチノキ林の利用をつうじた関係人口の創出	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 地理	6. 最初と最後の頁 48-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 八塚春名	4. 巻 30
2. 論文標題 タンザニアの狩猟採集民ハッザによる食料獲得戦略の多様化 民族観光と他民族の影響に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 農耕の技術と文化	6. 最初と最後の頁 113-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 藤岡悠一郎・八塚春名	4. 巻 34
2. 論文標題 文化景観としてのトチノキ巨木林	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 BIOSTORY	6. 最初と最後の頁 84-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 八塚春名・藤岡悠一郎	4. 巻 29
2. 論文標題 原発事故が引き起こした遠隔地の資源利用に対する派生的被害 滋賀県のトチ餅づくりにおける木灰利用を事例に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 環境社会学研究	6. 最初と最後の頁 104-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 八塚春名	4. 巻 23(2)
2. 論文標題 書評「伊谷樹一編、『つくる・つかう』（生態人類学は挑む4）」	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ地域研究	6. 最初と最後の頁 305-309
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 八塚春名
2. 発表標題 タンザニアにおける野生・半栽培植物の採集、販売、消費に関する予備的考察
3. 学会等名 日本アフリカ学会第58回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 八塚春名
2. 発表標題 狩猟採集民ハッザによる食用植物の採集活動 食事調査と場の分析から
3. 学会等名 日本アフリカ学会第56回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 八塚春名
2. 発表標題 タンザニア、ファルクワダムの建設計画に伴う住民の移住と農地の移転
3. 学会等名 日本アフリカ学会第60回学術大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 八塚春名
2. 発表標題 観光による文化の継承と土地の喪失 タンザニア狩猟採集社会の事例から
3. 学会等名 観光学会第12回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 八塚春名
2. 発表標題 在来野菜の採集・流通・消費 タンザニアでネバナバ料理に利用する2種の事例から
3. 学会等名 生態人類学会第29回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 八塚春名
2. 発表標題 トチノミを利用した食文化 その多様性と現代的な意義
3. 学会等名 全国トチノキ学ネットワーク準備会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Haruna Yatsuka
2. 発表標題 The role of individual mobility within the Hadza tourism in Northern Tanzania
3. 学会等名 International Symposium "Tourism, Development, and Conservation in Africa "（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Haruna Yatsuka and Kazunobu Ikeya	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 189
3. 書名 Rethinking African Agriculture: How Non-Agrarian Factors Shape Peasant Livelihoods (Goran Hyden, Kazuhiko Sugimura and Tadasu Tsuruta eds., Chapter4 "Farming Practices among African Hunter-Gatherers: Diversifying without Loss of the Past")	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------